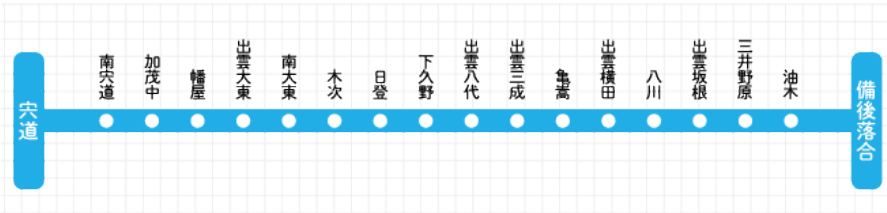


# 県北 どらくろあ

第94号 2024年1月1日（毎月1日発行）



## 木次線ストロール④ 奥出雲おろち号

### 「木次線のシンボルの観光列車 26年間の運行が終了」

今回の木次線ストロール、八川 駅をレポートするつもりだったが、取材予定日に雪が降って断念。さて、代わりに何を書くかで悩んだが、昨年11月23日で運行が終了した「奥出雲おろち号」のこと

を書くことにした。といっても、わたしは一度も乗車したことがない。全席指定の観光列車で、乗車券を取るのが難しいということもあるのだが、性格的に混雑している場所が苦手なので、興味はあっても、行動に移すことはなかった。余談だが、わたしは食べ物運が良くない。グループ旅行なら別だが、ひとり旅をしていて、美味しいものを食べたという思い出が少ない。理由はわかっている。お客の少ない店を選ぶからだ。地元の人からも敬遠されるような店では、味は期待できない。こんな性格だから、赤字ローカル線との相性はびつたり……。これでは本末転倒である（苦笑）。

前回の出雲坂根駅のレポートの時に、待合室で声をかけた旅行者のことを書いたが、その方からメールをいただいた。こんなミニコミ誌を出していますと、本誌の11月号を渡しておいたのだが、律義に連絡をしてくれたのである。出雲坂根駅から三井野原駅に向かう旧道の途中で再会、路肩の林の中から垂れたロープをつたって登ると、スイッチバックする列車の撮影スポットがあると教えてもらった。そのとき撮った写真がメールに添付されていた。撮影者の名前を明示することで、本誌への掲載の許可を得た。



上の写真が、八川駅から出雲坂根駅に向かって走る奥出雲おろち号。三段式スイッチバックの一段目になる。撮影者は、横浜市在住の梅津良典氏。初冬の山間を走るおろち号の雄姿が俯瞰（ふかん）できる。真ん中辺りに、出雲

坂根駅から折り返した二段目の線路の一部が写っていて、左上には線路の切り替えポイントのある防雪用のシエルターが見える。すべてが揃ったさすがの一枚である。

実は、わたしも同じ日、おろち号の写真を撮っている。出雲坂根駅から旧道の峠道を登って、三井野原駅の近くにある稚児ケ池神社に参拝したことまでは書いたが、その後、三井野原駅まで戻って車に乗車。国道314号線の稚児ケ池トンネルを抜けて、三井野大橋を渡り、道の駅「奥



出雲おろちループ」で昼食。

道の駅の駐車場の端に、深い渓谷を前にした展望台がある。木次線の撮影スポットになっている。木製の小さな机に貼り紙がしてあって、列車が通過する時間が書かれている。おろち号は、出雲坂根駅から三井野原駅に向かう途中の12時7分。反対に、三井野原駅から出雲坂根駅に向かう途中の13時28分。

早めに食事をすませて、11時半過ぎには展望台に陣取った。同じように、カメラを手にした観光客が数人



いる。それがどんどん増えてくる。12時過ぎには、道の駅の方からおろち号が通過するという告知の放送が流れた。さらに人は増えて、月曜日の平日なのに、30人は超えていたのではないか。

やがて、ガタンゴトンという音がだんだん大きくなって、渓谷の対岸の山の斜面に敷設した線路に、おろち号が姿を現した(1頁下写真)。道の駅の職員が待機していて、「みなさん、手を振ってあげてくださいーい！」と声をかける。撮影を一休みして、みんなが大きく手を上げて振る。わたしも振った。汽笛が響いて、おろち号の窓から手を振る乗客の姿が見えた。

そのあと、国道314号線を広島方面に向かって帰ったのだが、芸備線と併走する区間も多く、あちこちにカメラマンがたくさん待機していた。備後落合行きのおろち号は撮影したので、今度は折り返して木次行きの便を待っているのだろう。

備後落合駅が近づくと、車ではなく、重い撮影機材を抱えて徒歩で移動している人も何人かいる。おろち号を撮影するために、芸備線で備後落合まで来たのである。取材したのが11月20日、運転終了が迫っていることも当然あるの

だろうが、人気の高さを実感した。

観光トロッコ列車・奥出雲おろち号の運行がスタートしたのが1998年。ディーゼル機関車「DE10形」と、かつては急行などに使われた客車「12系」を2両つないでいる。客車の1号車は窓ガラスがなく、木製座席のトロッコ様式で、風が吹き抜けて、山の四季を体感できる。

2号車はリクライニングのクロスシート。1号車と2号車の指定席は重なっていて、乗客はどちらの車両にも自分の座席があつて、自由に移動することができる。運行は一日一便、木次駅を午前10時8分に出発、終点の備後落合駅には12時36分着。それから折り返して、備後落合駅を12時57分発、終点の木次駅に15時57分着。列車の連絡が悪いために、往復でおろち号に乗車する人が多いようだ。

このページで掲載した2枚の写真は、自分で撮影したのではなく、写真のフリーサイトに登録されていた作品を転載。構図やアングルが計算されたナイスショットで、それだけ鉄道ファンやカメラマンにとって認知度が高いということか。

来年度から木次線では、観光列車「あめつち」が走る予定だという。新たな区間で、春と秋を中心に年間30〜40日運行されるそうだ。運行日数が少ないのが気になるが、雨降って地固まる、廃線の暗雲が晴れることを願っている。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「ノラネコ日記」

新藤兼人 著 彌生書房

副題に「乙羽さんとドブ君たち」。著者は広島出身の映画監督、女優の奥さん、乙羽信子さんと暮らす赤坂のマンションにやって来るノラネコの観察日記。狭いマンションには二坪ばかりの庭があって、餌をもらいにネコたちが来訪。著者のネコ画が個性豊かで、目が鋭く野性的。ドブ色のドブ君だけは人懐っこい。



やがて、乙羽さんに肝臓がんが見つかり、遺作である「午後の遺言状」が完成するまでの闘病が始まる。独立プロは、一作でも企画が中止になるとダメージが大きいのだ。乙羽さんが亡くなるまでの生活やその後の独り暮らしも描かれているが、筆致はネコのように飄々としている。

## 「評伝小林和作」

高橋玄洋 著 創樹社

著者は、テレビドラマの名作「野々村病院物語」等で知られる脚本家。山口県の地方の名家に生れた小林和作は、生来の病弱と吃音症もあって家督を嫌い、父親の反対を押し切って画家の道を進む。最初は日本画を学ぶが、西洋画の自由さに魅力を感じて転向、自分よりも年下の画家たちに弟子入りする。



実家の財産を相続して、富豪画家として周囲の画家たちを援助、パリ留学も果たすが、実弟が資産運用に失敗して都落ち、家族で尾道に隠棲する。大器晩成、そこから和作の真骨頂で、風景画家として一家を成す。著者とのエピソードも和作の高潔な人柄を表している。

## 「風呂敷画商一代記」

油井一二 著 美術年鑑社

風呂敷画商とは、掛軸を抱えて行商する訪問販売業者のこと。昭和6年の暮れ、不景気で仕事も無く信州の農村の実家でくすぶっていた著者は、姉の電報で上京、東亜美術協会の出張販売員に採用される。戦前は朝鮮半島や上海、台湾まで足を延ばし、日本では北海道から九州まで精力的に行商。独立してからは画家に直に絵を依頼、武者小路実篤もその一人で、商売を超えた交流が生まれる。



山っ気のある著者は、様々な商売に挑戦するが、失敗も多く、結局、風呂敷画商に復帰している。商売の蘊蓄が満載、旅行記としても楽しい。副題は「商売から得た人生の苦楽」。

「ぐんぐん伸びよう会」 (教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

3～6歳

「どうして?」「なぜなの?」といろいろと疑問に思うことが出てくる時期です。お母さんが忙しい時でも、手を止めて、お子さんの目線に立って、短い時間で良いので疑問に答えてあげましょう。また、真似をしてチャレンジしたい時期です。目と耳はしっかりとお子さんに。



無料体験学習受付中!! お気軽に問い合わせくださいね。対象者:0歳～小学6年生

## ハロー注意報①

——進駐軍がいた町のはなし

# 進駐軍がやって来た！ 松岡初枝

私が住む埼玉県狭山市は埼玉県南部、東京の近くに位置し、航空自衛隊のある市である。今の基地は東京ドーム六十八コ分もの広さがあるが、それでも以前よりは狭くなり、市に返還された所に広い道路が通り、大

争直後の様子を知る人から見ると「まあ、ちよつと昔のはなしを聞いて」と言いたくなる。そう、戦後間もないこの町は、今では想像もできない程の様々な出来事があり、そんな時代に育った私の子供の頃に見聞きしたはなしを試してみたい。



昭和23年、戦後ベビーブームの中で作者は誕生した。

日本の陸軍航空士官学校跡に設置された。昭和二十年九月、いわゆる進駐軍がやって来たのだ。

なぜ日本軍の士官学校がある場所が空襲されなかったのか不思議に思うが、日本の敗戦を確実視したアメリカは、敢えて広々とした飛行場の

ある場所を温存し、占領後すぐに使うつもりでいたらしい。入間川流域にあるダム付近には小規模の空襲があつたが、もっと狙ってもいいはずの飛行場は無傷だつた。八月終戦、九月にはもう空軍司令部を置く素早さだつた。

それから数年、昭和二十三年、埼玉県入間郡入間川町で私は生まれた。そう、まさに戦後ベビーブーム世代のひとりだつた。

戦争が激しくなる直前、父母は婚約したが父はシンガポールやインドネシアで戦う兵士となり、母は勤労奉仕隊で戦地へ送る物資づくり

に忙殺される日々、祖父の鉄工場は軍需工場と化し、祖母の営む美容室は開店休業、何てつたつておしゃれは敵、パーマネットはやめましようという世の中だつた。

昭和二十二年、父は捕虜となつていたインドネシアの地からやつとの思いで復員し、生還を待っていた母と結婚した。大変な思いで戦時を生き抜いた大人達は、私の誕生を心から喜んだと聞いた。何はともあれ、私が物心のついた頃、町の中にはアメリカ兵が数多く居て、日曜の昼さがり、奇麗な格好をした家族づれや米兵と肩を組んで歩く日本のおネエさんが町に溢れていた。

進駐当初は入間川航空基地と称していたが、昭和二十一年から「ジョンソン空軍基地」となり、昭和二十五年に朝鮮戦争が起きてからは、一気に兵士の数が増えたのだ。基地のある高台から毎朝アメリカ国歌が風に乗って流れ、当初耳をそむけていた人達も「アメリカ野郎」から「アメリカさん」と呼び方も変えていったのは、何といつても強いドルをバラ蒔いてくれる、超円安ドル高の時代だつたせいもあり、金持ち米兵は土産物などを買いまくつた。陽気な彼等は「ジャパニーズ・ブレイブ・ブツク」という会話手帳を手にして話しかけてくる。「ハロー」「サンキュー」を連発して笑顔で近づく大人、「ハローギブミー」と手を出す子供、米兵はその手にガムやチョコレットを渡して笑いかけて歩く。何もかも物量の多さに圧倒される日々だつた。

基地の将兵が増えると同時に、基



「ジョンソン空軍基地」に接する広い場所に  
将校ハウスが次々と建てられた。

地に接する広い場所に「ハイドパーク」と名づけられた将校ハウスが建つ住宅地が出現した。真白いハウスが緑の芝生に点在する様は、まるでアメリカ映画の世界さながらで、有刺鉄線で囲われたハイドパークのゲートには「立入禁止」と書かれた大看板が立ち、中は米国、外は日本、子供の目から見てもその差は歴然としていた。中で生活するアメリカ人家族の母親や子供達の小さっぱりした服、外の子供達はランニングシャ

ツに下駄ばきの男の子、よれた簡単服の女の子、ここでも戦勝国と敗戦国の格差がありあったが、そこは子供、特に男の子達は「パーカ！アメリカゴーホーム！」と大声で叫ぶと中の子供も「ヘーイ！シャラップジャップ！」と負けていない。言葉は強いが顔は笑っていたから本気度はいいかげんなものだが、子供達は変に盛りあがった遊びの類이었다と思う。

ハイドパークは元々あった稲荷山

公園の場所にあり、多くのアカマツや桜で美しい憩いの場だった。そこが日本人立入禁止になったので、大人も子供も複雑な気持ちになるのも無理からぬところであるが、まあ仕方無いさと甘んじていた。この公園は桜の名所で、春、満開の花の下での花見は、今でも市民の楽しみのひとつとなっている。

「ゴボーさんが来るよー」誰かが大声で言う  
と、女、子供がバラバラと家から出てくる。ゴボーさんとは米軍のM・

Pで軍曹、サージャントの階級章をつけた軍服に白いヘルメットに黒くM・Pと書いたのを冠り、半長靴にズボンの裾をつつ込み、肩からはカービン銃を下げて大股で歩いて来る。二、三人の部下を連れて朝のパトロールをする姿は、文句なしにカッコ良かった。アメリカドラマ、コンバットのサンダース軍曹そっくりな格好だが、何といっても美男子で長身、白人とプエルトルコ系の血をひく愛嬌者で、近所のオバサン達は手を振って「ゴボーさん」と呼ぶ。子供もゴボーさんが好きで、いつもチョコやガムを貰っていた。オジサン達が「何だつて牛蒡みてえな名前しやがつて……」とつぶやくと、オバサン達は「あんた、ゴボーじゃなくてゴボーなの！」ここでも元氣な女達、タジタジの男達だが、それでも顔を出していた。

「オッハヨゴザイマース」右手を上げて歩くだけで町の人々の心を虜にってしまった彼は、まるで映画スターのようであり、やがて日本人女性のオンリーさん、言わば現地妻の美人と同棲するようになった。着物姿の彼女とゴボーさんが休日散歩している様子は、どこから見ても絵になると思った。数年経つと彼は転任し

て行ってしまった。町が急に淋しくなり、彼女は同行せずひとり残り残された。彼には国に妻が待っていたのか、それとも一緒に行く勇気が無かったのかは判らないが、やがて彼女の姿もこの町から消えてしまった。

ゴボーさんの彼女のようなオンリーさんも居たが、米兵相手の女達も数多く居て、基地から近い場所にはかなりの数のパ○パ○ハウスが出現し、その女達が我が家の美容室にも客として来る。煙草プカプカ、落下傘スカート、赤い口紅のおネエさんは米兵から貰った菓子を持って来てくれる。嫌な顔をする人もいたが、そんなこと気にしないさと大声で笑っていた。そんなおネエさんのひとりが米兵からブラジャーを貰った。それを借りた化粧品屋のおばちゃんに似たような物を作った。「材料が無いからさ、帯芯に白い布被せてうしろに巾の広いゴム付けたのよ」。大・中・小のサイズ分けをしたら特大も作つてという注文が入り、毎日夜なべでミシンを踏み店に置いたらあつという間に売り切れた。やっぱり女は逞しい。

今回は「すず子とジョージ」、米兵と日本人との混血児のおはなしです。

待合室のベンチに腰かけて、アルマイトの水筒の水をグビりと飲んだ。長年使い込んだ水筒は、蓋もなくなつて、あちこちにへこみができている。真冬の湧水だが、ほんのりと温かい。「延命の水」と呼ばれて、地元の人はもちろん、遠方からも水を汲みに来る人も多いという。

『鉄道開通までは、この延命水付近は清水堀と呼ばれた湿田でありました。』

古老の伝えによれば、昔、キツネや狸も多く、しかも寿命100年をこえたと思われる古狸が好み飲用したこと、里人も長寿の霊水と称して飲用をはじめ、そのうち延命の水と名付けられたと伝えられます。『水場の解説板に書かれている。木次線の出雲坂根駅は、延命水の湧き出る駅として有名だった。』

「失礼します」

一声かけて、その人物はベンチの端に腰かけた。頭はほぼ白髪で、七十年配だろうか。スポーツ選手が着るような派手なオーバーコートを着込んでいる。

「大学生の甥から借りてきてましてね」

わたしの視線を受けて、その人物が言い訳した。

「実は、わたしはホームレスなんです

すよ。氣候が暖かいときは北に行き、寒くなれば南に行く。着たきり雀で、着替えがなくても大丈夫。汚れれば、安い古着でも買って着がえればいい」

上品な顔立ちに笑みが浮かんだ。

「この駅に来たのは三十年ぶりです」

問わず語りに、自分の過去を話し始めた。

「まだ古い駅舎だった。この駅で降りるつもりはなかったんです。雪が積

わたしは、うんうんと同意した。

「だけど、雪のおかげでこんなに空気が澄んでいるんだと言った笑顔がとても魅力的で、すっかり打ち解けて、いろんな話をしました。延命水の話も聞きました。その方が持っていた古い水筒は、戦地から復員した友達にもらったそうなんです、その友達が出征するときに、その水筒に延命水を入れて持参した。いつも全部

# 長寿の霊水

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑧

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

もって、線路の除雪のために足止めされましてね。喉が渴いていたんで、外に出て雪をすくって口に入れようとしたら、声をかけられたんです」

苦笑が浮かんだ。

「雪は空気中の塵や埃が核になった水の結晶だから、食べるのはやめると

注意されました。都会育ちのわたしは、かき氷のような感覚でいたんですが……」

すが……」

が行き詰まりましてね。ネット社会になって、個人が自由に旅行プランを立てられる時代に、うちの小さな小さな会社の出る幕はありません。

会社の借金や社員の退職金を自分の保険金で賄うつもりでした。それが、延命水をご馳走になったんですからね」

愉快そうに笑った。

「結局、それで憑き物が落ちたように死ぬ気が失せて、できることはなんでもやって、それでも駄目なら土下座して謝ろうと覚悟して帰ったんです。そうしたら、大手旅行会社から買収の話がきて、支店として社員も面倒をみていただくことになりました。これも、延命水のおかげかもしれませぬ」

当時のことを思い出しているのか、遠い視線になった。

「借金もなくなつて身軽になれたので、旅行雑誌の編集者に頼まれて、自分が企画したツアーでの体験談を書くようになったんです。それが好評で、あちこちから声がかかるようになりまして。ネットの旅行サイトもどんどん増えましたからね。ある

とき、旅先のネットカフェのパソコで、依頼された原稿を書いているときに、ふと思っただんです。別に家



に帰らなくてもいいじゃないか。ここには必要なものはなんでも揃っている。シャワーも無料のレンタルタオルもある。ネットカフェがない場所では、安い宿屋を探せばいい」

そうして彼は、アパートを引き払って、ネットカフェで暮らすようになったという。「ネットカフェ難民ではなく、わたしはネットカフェ移民です」、そう言つて笑つた。最初のうちは、大きな荷物を抱えて移動していたという。それがど

んどん少なくなつて、今ではほとんど手ぶらで動いているという。

わたしは水筒を口に運んで、またグビりと飲んだ。

「実は、これをお返しするために来たんです」

オーバーコートの中に手を入れて、アルマイトの古びた器を取り出した。三十年前に延命水を飲むときに使つたものだという。トイレの手洗い場で水洗いして戻つて来た時には、その人物は姿を消していたという。他の乗客のグループが来たからだろうか。

「あなたですよ。あのときとまったくお変わらないので、最初は息子さんなのかと思ひました。でも、話をしていて、ご本人だと確信しました」

わたしは器を受け取つて、水筒の水を注いだ。

「いかがですか？」

彼はしばらく器の水を見つめていた。

「もう十分に長生きしましたから。それに……、向こうでは、妻が先に行つて待っています」

わたしは頷くと、グビりと器の水を飲み干した。腕を振つて水気を切ると、逆さにして水筒の口に重ねた。

くるくると回して蓋を締めた。蓋の器に嵌め込まれた小さな磁石の針がくるくる回っている。

会釈して立ち上がると、彼が深々と一礼した。

(人間にしておくのは惜しい人物だな)

心の中で呟いた。仙界への扉の前に立っていることを、本人は気づいていない。

駅舎を出て、国道を横断して階段を下つた。延命水の古い水場がある。苔むした石壁から突き出た三本のパイプから、こんこんと湧水が流出している。水筒を満タンにして、首から紐をかけた。

(さて、帰るか)

駅前の駐車場に錆びだらけの自転車が置いてある。またがって、ゆっくり漕ぎ始めた。次第にスピードが上がってくる。おろちループに差し掛かる頃には、自転車はレース用のモーターサイクルへと姿を変えて、爆音を響かせながら疾走する。そのままループを滑走して、空へと飛び出した。

長い白鬚の老狸を載せた青い龍が、三国山の上空を何度か旋回して、やがて山中に姿を消した――。

## まつの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

## 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

## 第二部 歴史事項を見る

六月一日鹿ヶ谷の変 治承元（一一七七）年

この時世にあって、平家の政界進出は一門の栄耀豪華をもたらしたが、一方で他の貴族層の反感を募らせるようになっていた。治承元年に入ると、藤原成親をはじめ、反平氏の人たちは東山の北麓鹿ヶ谷にある、俊寛僧都の山荘に寄合い平家討滅のこ



とを密議するようになった。集まった人は、成親のほか俊寛僧都、西光、平康頼、北面武士多田行綱たちで、後白河法皇もおしりのびで参加したこともあったという。

五月二十九日深夜、多田行綱は平清盛の邸を訪ね、鹿ヶ谷山荘での謀議を告げたのである。西光は、六条川原で処刑。成親は重盛のとりなしで、備中国に流すことにされたが、途中で殺された。俊寛僧都、平康頼、成親の子成経の二人は鬼界力島に流された。このことは、「平家物語」に扱われている。

六月二日日本能寺の変 天正十（一五八二）年

この時期、信長は家康の協力を得て、甲斐の武田勝頼を討ち滅ぼした。家康の戦功を賞し、今川氏の旧領駿河を与えた。その礼を陳（の）べるため、同年五月安土城に祇候（しこう）した。一方、羽柴秀吉は、備中の高松城を攻め、後巻に毛利が控えており信長の来援を求めた。信長は、光

秀に備中出陣を命じた。光秀はひとまず丹波亀山に戻った。そこに、信長が僅かな人数で本能寺に宿泊すると言う情報が入った。

日頃の遺恨が募る、いつ処罰されるか不安と恐怖、そして主君として信頼が出来なくなった。暗殺するには、この好機しかないといふ決意し、一万余の兵で二日の早晩に本能寺を包囲した。享年四十九歳。小姓森蘭丸以下数十人が信長の死に殉じた。版画は「真書太閤記本能寺焼討之図」。

六月五日池田屋事件 元治元（一八六四）年

京都三条小橋、池田屋で桂小五郎をはじめとする長州藩、肥後藩、土佐藩の尊攘激派志士が謀議中、近藤勇率いる新撰組は多数を斬り、逮捕した。辛うじて、桂小五郎は逃れた。

六月十三日山崎の戦 天正十（一五八二）年

明智光秀と羽柴秀吉の弔い合戦。秀吉は備中高松城水攻めの最中に信長父子の横死情報が入り、これを嚴重に秘し、六月四日のうちに和議を成立させ、六日に高松城を撤退し、二十七里の道を一昼夜で走りぬけ、七日の夕方に播州姫路に引き揚げた。八日に姫路を出馬し、十一日に尼崎、十三日山崎街道に布陣した。この戦、

亡君の仇討ちということで、秀吉軍の兵力が勝り勝敗は二時間で決した。光秀は近江の坂本に向かつて逃走中、土民の竹槍に突かれ、わずか十一日目以最期を遂げた。世にいう「三日天下」である。

六月二十四日壬申の乱 天武元（六七二）年

天智天皇の子大友皇子と、天智天皇の弟大海人皇子との間の皇位継承の争いに始まった内乱である。天智天皇は大海人皇子を次期皇位継承者としていたが、晩年に大友皇子に皇位継承しようと、彼の政治的地位の強化をはかった。

弘文十（六七二）年十二月、天智天皇崩御。政情不安の中、天智天皇に対する豪族層の不満組を動員した。七月二十二日大友皇子は敗れ自殺。大海人皇子が天武天皇として即位。

六月二十八日姉川の戦 元亀元（一五七〇）年

織田信長・徳川家康の連合軍と、浅井長政・朝倉義景の連合軍の、近江の姉川流域での戦で織田・徳川が勝利する。戦の発端は、朝倉氏が信長の上洛催促を無視し、將軍義昭と結んで反抗の姿勢をあからさまにしたことにあった。

シニア海外ボランティア・エピソード⑬

## 「大使館とJICA本部、 大学恩師の墓前に帰国報国」

山崎 允まこと

2004年4月24日、シニア海外協力隊の任期を終え、約20時間のフライトで関西空港に到着した。今まで使っていたダーク・グリーンの「公用旅券」の使い納めだった。国と国との仕事に携わる人間が、世界のどの空港でも特別扱いのカウンターを使える旅券である。

翌日、はやる気持ちにブレーキを掛けながら、今度は新幹線でJICA（国際協力機構）本部とザンビア大使館に、帰国報告のため上京した。神戸から新大阪駅経由で東京駅に着くと何か異様な雰囲気。キオスクの新聞受けに「号外」の大文字の新聞が無造作におかれていた。見出しから判断するに、約3時間前に通過した尼崎駅の手前あたりで7両編成の快速電車5両が脱線転覆し死傷者が多数出ているようであった。ザンビアに比べ、日本はすべての交通機関が安全であると誇らしげに語っていたのに……。プラットホームで黙祷をささげた。

複雑な気持ちのまま五反田駅からザンビア大使館を目ざした。シマシク大使（写真左）とハグの挨拶。観光促進担当ムンダンダ一等書記官とは、ザンビア独特の握手（親指の位置を相手の親指の上、下、そしてまた上と、3回握り返す）で「マオカポアンジ」と現地語で挨拶を交わ



した。もう一人忘れてならない日本人秘書官の三石嬢に、感謝の気持ちを込めて挨拶した。

本国の観光省、そして東京大使館に関して言えることは、ボアランティアの手を差し伸べる国々からの「援助慣れ」と、自助努力の不足である。JICA宛ての最終報告書に記述したが、ザンビアの観光省、大使館あてには記述することを控えた。

私個人で何ができるか？ とりあえず、愛知万博のザンビア・ブースでこれから約5か月間、無償でボアランティア勤務する許可を大使から得た。今まではJICAから派遣されたボランティアであったが、これからはヤマザキ・マコト一人人がザンビア共和国に対してボランティア活動をすることを決心したのだ。

次に、市ヶ谷にあるJICA本部に向かった。ザンビアに出発した時の同僚は5人で、出発前の打合せをした場所であった。その時は、仲間というよりはライバルのような感じでしたが、あの時のような緊張感は全くなく、「やりとげた！」という達成感があるばかり。用意されていた外務大臣町村信孝氏の感謝状をいただいて、2年半のJICAとの関係に終止符を打った。

横須賀線、鎌倉駅で降りて大学の恩師であった金丸平八先生のお墓にお参りした。卒業論文で新聞、雑誌、専門誌等からの引用が多いと注意された。「ヤマザキよー、印刷になっている活字はなんでも信じるのか？」「自分の目、耳、手、足を使って自分なりに努力をすることをしろ！」と叱責された。先生の忠告を受けて、日本国有鉄道買収論をテーマにした論文を中味あるものにするために、千葉県安房鴨川市にある国鉄の機関庫に知人を訪ねて取材させてもらったり、東京駅の手荷物を仕分けするアルバイト体験をしながら、卒業論文を仕上げた。

先生の自宅を訪ねて、図々しくも卒業させてくださいと頼み込んだ。庭で一時間待たされた。だめならまた母に一年間、迷惑をかける。「よくやった！ オッケーだ」と先生から言ってもらったときは、その場にヘナヘナとへたれ込んだ。

それから5年後、先生は神戸で学会があったついでに私の自宅に立ち寄ってくれた。妻子の前で説教もされたが、先生の思いやりが心にしみて涙が溢れた。先生愛用ピーカン（ピースの缶入りたばこ）とお花を供えて、帰国の報告をした。

## どらくる俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

多喜二の忌口が裂けても言へぬこと

近藤 昌平

捨て聖ひじりとなつて行きたし雲の峰

富久光

いくさ無き国の行方や冬霞

片岡 正人

郷静かただ聞こえるは虎落笛もがり

隆愚

廃線の噂の鉄路枯尾花

大槇 三代子

日記買うページめくれば一茶の句

寺内 龍二

古本の埃払いて大晦日

赤川 冬人

寒き夜の鍋の湯気立つ食卓に

松岡 初枝

今年は若き顔ひとつ増え

## 投稿&寄稿

候のことば

はつあかね

「初茜」

隆愚

初日の出の直前の茜空を、初茜と  
いいます。

夜の暗がりから白み、明るみ、や  
がて茜色に染まる東雲（しののめ）

の空は、日の出より先に元旦の訪れ  
を告げます。

初茜してふるさとのやすけさよ

木下夕爾

初茜とぢし臉も薄あかり

加倉井秋を

みくじ凶結びて仰ぐ初茜

鈴木美代子

## 「倉田百三友の会」赤川仁洋

音谷健郎氏が本誌で取り上げてい  
る作家の倉田百三だが、残念ながら、  
地元でも認知度は下がるばかり。と  
くに、若い世代に知らない人が増え  
ている。

倉田百三は明治24年、庄原村（当  
時）の倉田呉服店の長男として誕生。  
庄原小学校、三次中学、東京第一高  
等学校と進学。全国から秀才が集ま  
る一高で、首席を取ったこともある。  
同級生に芥川龍之介の名前がある。

結核の療養中に、26歳のときに書  
き上げた戯曲「出家とその弟子」が  
大正6年、岩波書店から刊行され大  
ベストセラーとなる。大正10年に出版  
された哲学的エッセイ集「愛と認  
識との出発」は、青春時代の若者の  
必読書と言われるほどの反響を得  
る。

郷里の文豪、倉田百三のことを  
もっと知ろうということで、庄原で  
は市民グループ「倉田百三友の会」  
が活動していた。中心を担っていた  
のは倉田百三研究家として著名な土  
居緑氏だが、残念ながら2020年  
8月に86歳で逝去。コロナ禍もあつ  
て会は休眠状態だったが、昨年7月

に新生「倉田百三友の会」がスター  
トした。会長は、旧友の会のメンバ  
ーだった松園真氏。新規メンバーも加  
わって、現在の会員は8名。音谷氏  
もその一人で、会場提供（どら書房  
漫画ルーム）のわたし（赤川）も末  
席に加わっている。

月に1回のペースで会合を開いて  
いるが、道路拡張で取り壊し予定の  
武村邸（百三の祖父の実家）の金庫  
から、倉田百三直筆の庄原小学校の  
校歌の草稿を発見するなど、大きな  
成果も上がっている。

友の会の活動に興味がある人は、  
参加を歓迎（見学だけでもオッ  
ケー）、どら書房まで連絡を！



# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

## どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：2月17日(土) 13:30～15:30

テーマ：「庄原の森を活用した楽しい子育て」

講師：八谷恭介氏

(NPO 森のバイオマス研究会)

場所：生活交流館 1

(備後庄原駅隣接)

参加費：500円

(学生 200円、お茶菓子代込み)

申込み&問合せ：080-3631-9125 (やない)



さけくらべって  
なんじゃる？

庄原の地酒や酒を  
お楽しみしたい  
ひとびとが  
ぜひ体験したい  
イベント



\_sakekurabe\_

庄原酒販 presents 利き酒・試飲イベント

# さけくらべ

IZENOMI SHOBARA-CITY SAKE MARCHE

## 1.20

土曜日

朝10時より昼15時まで

### お酒のお話

し・ま・せ・ん・か？

毎月一回開催中

comeme  
市場

場所・お問い合わせ

## 庄原酒販有限公司

庄原市中本町1-8-1  
☎(0824)72-2183

## 「旧暦カレンダー」(販売価格：1,650円)

- ・日本の自然に根差した暦(こよみ)です。
- ・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・新暦(太陽暦)も併記しているので便利です。
- ・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・自然災害の予測ができます。

## どら書房にて令和6年版好評販売中!

(残りが2部になりました)

※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。



発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

## 編集後記

◇新年、明けましておめでとうございます。コロナの心配をしなくてもいい年末年始ですが、ウクライナ紛争の終わりが見えません。パレスチナにも戦火が上がって、暗雲が世界を覆っています。

◇松岡初枝さんの「ハロー注意報」、敗戦後の庶民の生活が描かれています。戦争にも負けない雑草のような逞しさ……、一日も早く世界が“戦後”になることを祈ります。

◇新年の抱負は……、毎月、本誌を発行することでしょうか。今年7月で百号になる予定です。古本屋のおやじとしては、溢れかえる在庫の整理が永遠の課題。ベッドのそばまで古本の山ができています(苦笑)。

第268回

くんちいち

# ひょうばあ九日市

出店予定一覧（順不同）

- ・文屋
- ・郷屋
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・お福
- ・工房アム
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・とらぢ

- ・健康企画グループ
- ・さだっさ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・克国水産
- ・田崎屋
- ・宮川屋
- ・和み屋
- ・どんぐりーず

- ・てしごと比和
- ・アーミッシュ
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・17KICHEN
- ・かぐや姫
- ・土遊び布遊び
- ・佐藤園芸
- ・ふくふく牧場
- ・寄能商店



**恒例、新年大福引大会！**

★300円以上購入で抽選券進呈★  
 場所：三上宅 開始時間 10時～  
 特賞：旧聖徳太子1万円札2本  
 九日市出店者が多数賞品提供！

**1月9日(火)**

9:00～13:00



## TOPICS

- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」  
1月8日(月)～10日(水) 10時～15時  
世界児童画作品展
- ★HONMACH STAND→コーヒー100円引き
- ★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き  
九日市特製ピタサンド600円
- ★どら書房→休憩室(漫画ルーム)あります！

\*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～  
 九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285  
 〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

